観光経済

新幹線開業による地域活性化対策について

質問　新幹線開業効果を生かすための取り組みについて伺いたい。

また、仮称七戸駅から十和田湖への観光ルートのポイントについて伺いたい。

答弁　十和田市新幹線開業効果活用推進協議会を立ち上げ、具体的な取り組みを進めることとしている。また、観光産業の振興による雇用の創出を目指している十和田市雇用創造推進協議会が今年から三カ年にわたり、厚生労働省の委託を受けて実施する事業に十和田市独自の観光づくりやブランド化を担う人材育成事業が予定されている。

観光ルートについては、官庁街通り、道の駅、馬事公苑、新渡戸記念館等、当市の観光施設をPRする必要があるため、ホームページの充実や観光パンフレットの作成等はもちろんのこと、市長自らJR、旅行代理店を訪ね、本市の魅力を積極的にPRしているところである。十和田湖へのルートの設定を考えた場合、奥入瀬渓流、それから現在建設中の『十和田市現代美術館』が新しい観光資源として誘客に大きな成果を果たすものと考える。

10月の十和田湖から

奥入瀬渓流の環境保全と活用について

質問　奥入瀬渓流の環境保全と地域の活性化を一体となって考える国、県、市、関係機関、民間団体、専門家等による常設的な協議機関を設置する考えはないか伺いたい。

答弁　現在、当地域に係る協議機関としては、奥入瀬渓流利用適正化協議会、十和田湖周辺交通渋滞対策協議会、十和田湖・奥入瀬川の水環境・水利用検討委員会、青橅山バイパス環境検討委員会及び十和田湖観光再生検討会等、様々な機関があり、十和田湖、奥入瀬渓流の環境保全や地域の活用等について、鋭意協議を重ねている。このような状況から、現時点では新たな協議会の設置は考えていない。

グリーンツーリズムについて

質問　交流人口の拡大を期待できるグリーンツーリズムの取り組みについて伺いたい。

答弁　今年五月に市内の農家で構成している十和田市農業体験連絡協議会が初めて東京から中学校の一学年を単位とした農業体験を含めた修学旅行を受け入れている。現在、さらに大きな規模での受け入れができるよう、受け入れ農家の増加や体験指導者の育成等の体制を整備しているところである。

また、新幹線開業を効果的に活用するために、修学旅行や一般の方々にも農業体験を組み入れて、体験型施設や十和田湖、奥入瀬渓流という観光資源の活用、独自性のあるホテル等の宿泊などとの多彩な組み合わせをメニューとして、自然との触れ合いや田舎体験志向のニーズをとらえたグリーンツーリズムを提供していきたいと考えている。

奥入瀬川の魚について

質問　観光地の中で景観のすぐれた奥入瀬川について、現在の淡水魚の種類と釣り客数はどれくらいか伺いたい。

また、その淡水魚の養殖ふ化事業への支援策について伺いたい。

答弁　奥入瀬川漁協が指定している漁業権魚種は、ヤマメ、イワナ、ニジマス、アユ、ウナギ、コイ、ウグイの七種類となっている。釣り客数は、平成十六年度は七百六十三人、十七年度は四百八十二人、十八年度は六百五十六人となっている。

また、現在、奥入瀬川漁協が取り組んでいる養殖ふ化事業は、対象魚種の受精卵及び稚魚を購入してきて放流しており、その放流事業に対し支援を行ってきている。さらに養殖ふ化施設については、奥入瀬川漁協が具体的な事業計画を策定した段階でその支援策について検討することとしている。

農業政策について

質問　気力の持てる農業・農村づくりのためには、農業に対する十和田プランの策定が必要と考えるが、どのように考えるか伺いたい。

答弁　当市は、恵まれた地域資源を活用し、米の生産調整以降、畜産、ニンニク、長芋、ゴボウ、ネギ、あるいは高原作物等、様々な作物に取り組んできている。そうした中で、意欲を持って農業に取り組んでいくためには、一つとして消費者ニーズにこたえた安全、安心な良品質の農産物の取り組み、二つ目として農畜産物の高付加価値化の推進、三点目として地産地消など販売の多様化への取り組み、四点目として効率経営の推進による低コスト化農業の取り組み、五点目として担い手の育成確保対策などが重要であると考える。今後、これらの計画達成のために関係機関とともに支援していきたい。

買い物客等で賑わう　道の駅とわだ

道の駅とわだについて

質問　先日、他の道の駅に寄ったところ、多くの人で賑わっており、それぞれのコーナーで生産者と思われる方々が野菜や果物を威勢の良いかけ声を張り上げて売っている光景を見たとき、十和田の道の駅とはひと味違う印象を抱いた。何か今ひとつ活気が感じられない道の駅とわだの運営状況はどのようになっているのか伺いたい。

答弁　道の駅とわだセンターハウスでの売上高は、平成十四年度約三億二千八百六十万円、十五年度約三億九千百七十万円、十六年度約四億二千四十万円、十七年度約四億一千七百二十万円、十八年度約四億二千十万円となっている。

道の駅とわだの利用者数や売上額、また、匠工房での南部裂織体験利用者数から運営状況を判断した場合、順調に推移していると考える。今後はさらに活気のある道の駅とわだとするため、指定管理者とテナントが連携をして、もっと創意工夫を凝らしたイベントの開催、顔の見える産直活動を実施するように助言していきたい。